

2020年5月10日

東京聖三一教会

わたしは道であり、真理であり、命である。



日本聖公会東京教区

東京聖三一教会

2020年5月10日(復活節第5主日)

東京聖三一教会

わたしは道であり、真理であり、命である

司祭マリア・グレイス笹森田鶴

70年にエルサレム神殿が崩壊して以来、イスラエルの人びとは神殿中心の生活から、律法や戒律を守ることや愛と慈しみの行為中心の生活の実践へと移行していました。ファリサイ派が中心となって会堂で集まり、ユダヤ人の結束を保っていました。そこにユダヤ人キリスト者も集まっていました。

しかしその後、会堂での公の祈りである十八祈祷文(シエモネ・エスレ)に異端者の祝祷(ビルカト・ハ・ミニーム、敵や裏切り者、異端者の速やかな滅亡を求める祈り)が加わってしまいます。

この祈りによって、ユダヤ教からキリスト教が追放されていく事態となります。ユダヤ教の中で緩やかに分派として存在していた頃とは全く違う事態がキリスト者にのし掛かってきていました。

ヨハネ福音書は、そのような厳しいキリスト者の状況の中で綴られた福音書です。イエスをキリストと告白するのか、それとも会堂追放を恐れてユダヤ教に留まるか、まさに命をかけての選択を迫られていたのです。前者の「道」しかないとなれば、それは会堂追放を意味します。会堂追放とはユダヤ教からの追放だけではなく、生活基盤そのものも

失う可能性を含んだものです。まさに命そのものが失われるかもしれない中で、ヨハネ福音書はキリストの言葉を残します。

「わたしは道であり、命であり、真理である。」(14:6)

この言葉は闇の深まる夜に語られています。イエス様を中心に弟子たちの集まっている場所の外は、漆黒の闇でした。その闇の中にすでにユダは消えていってしまっています。

そして今週の福音書である 14 章1節からは主イエスさまの「告別説教」が本格的に展開され、16 章まで続きます。

この「告別説教」が語られている家の中には光が満ちていますが、その外は闇の中です。それはまるでヨハネ福音書が綴られた当時のキリスト者の姿のようでもあり、また現在のわたしたちの姿のようでもありません。

弟子たちは、主イエスさまが自分たちから去っていくと聞かされ、動揺しています。その弟子たちに主イエスさまは、「心を騒がせるな、信じなさい」と語りかけます。

そして弟子たちと離れた後、ご自分が何をしようとしているのかを告げられました。それは、弟子たちが人生の痛みや別れの痛みにただただ巻き込まれ続けるだけの日々とはならないように、その後に主が用意してくださる場所を指し示すものでした。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」

この言葉こそが、神の国を指し示す言葉です。

今日の特祷にもヨハネ福音書によく使われる「永遠の命」という言葉が出てきます。神さまを「まことに知ることは、永遠の命に至る道です」(祈禱書 220 頁)とわたしたちは祈ります。そして神さまを知るということは、神の国への道を知るということにつながると告白するのです。

神の国とは、すべての人の心と社会のすみずみに神さまの正しい支配が行き渡る状態のことです。神さまご自身が人間の生きる基準や、社会の価値基準として大切にされる「現実」のことです。決して空の上の場所でもなく、今は行けない遠い場所のことでもありません。

神の国は、神さまを神さまとも思わないで自分の力だけで生きていると我が物顔に振る舞っていた人が恥じ入ってしまうこと、そして孤児ややもめを虐げていた人が退けられ、権力と富を恣に驕り高ぶっていた人がその座から引き下ろされることです。

しかし反対に、神さまの正しい審きを待ち望んでいた人は高められ、飢えていた人は良いものを与えられ、差別され悲しんでいた人は喜びで満たされるようになるという現実が起こることです。

長い間イスラエルの人々は、そのようなことがなかなか起こらずに、貧しい人がますます虐げられていることを見るにつけ、次第に神の国はこの世の終わりが来ないと実現しないと思うようになりました。それでも、この世はまだまだ闇や悪の力が支配していて、神さまの支配がすみずみまで起こるようなことが見えない、だから、神の国が早くやって来てこの悪の支配を打ち破ってくれないだろうか、と願ってもしました。

人の心は現実の苦しさや厳しさの中で当然揺れるのです。

そのような中、主イエスさまは、神の国は今や、自分を通してやってきたと告げられます。それは今、弟子たちと一緒にいるここでも実現されつつあるのだと教えられます。漆黒の闇が覆う中で語られるのです。

その究極的な姿が、道として与えられる主イエスさまが「用意してくださる場所」という言い方で表現されています。

決して来世の幸せのことを言っているのではありません。救いはすでにこの地上で始まっています。

主イエスさまはこの告別説教の後闇の中に出向いていかれ、捕らえられ、死を迎えられます。永遠の命に至る道は、死をも含む道です。

しかしキリストは、闇を切り裂き、墓から飛び出して永遠の命をこの世界にもたらしてくださいました。そして神の道に生きる信仰の道を通して、わたしたちがこの世においても神の国をすべての人と分かち合うことを可能にしてくださいました。闇の只中にいるように思えても、ここにも神の国があると確信することができるようにしてくださいました。

大いに心揺れ動くこの社会の只中に生きるわたしたちが、ただただ

闇に飲み込まれることなく、闇の存在を感じながらもその先の場所を見極め、主イエスさまの指し示される道を、永遠の命への道をご一緒に力強く歩むものとなっていくことを心から願い求めます。